

# たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報 No. 37 平成8年6月20日



東山道武蔵路の空中写真（平成7年10月6日）上方が南側で、道路は多喜窪通り。右下は、多喜窪通りからの景観。

## 古代の道——東山道武蔵路

調査研究部係長 雪田 隆子

古代の官道である七道については、文献等から存在が知られていました。しかしながらその位置や規模が調査されるようになったのは、ついこの数年のことです。

東山道武蔵路の道幅は9〜12mといわれていましたが、昨年度の調査により、両側に側溝をもつ、12mの道幅であることが確認されました。総延長330mもの規模で調査されたのも、初めてのことです。

調査地点の南約400mには武蔵国分寺と国分尼寺が位置していますが、道はほぼ南北に一直線に延びて両寺域の真ん中を通り、武蔵国府へ続いていると思われれます。武蔵国は、宝亀二(771)年に東海道に編入されるまでは東山道に属しており、当時、この道こそが国と郡と武蔵国を結ぶ動脈路でした。それだけにこの古代遺構の壮観な様は見る人を圧倒し、感動させるものでした。

この道路跡も、その大部分が現在の道路建設により失われようとしていました。しかし、露わになった古代の道の存在が各方面を動かし、建設側もその重要性に理解を示して設計変更したことで、調査範囲の全域が保存されることになりました。調査に携わった一員として、喜びもひとしおです。

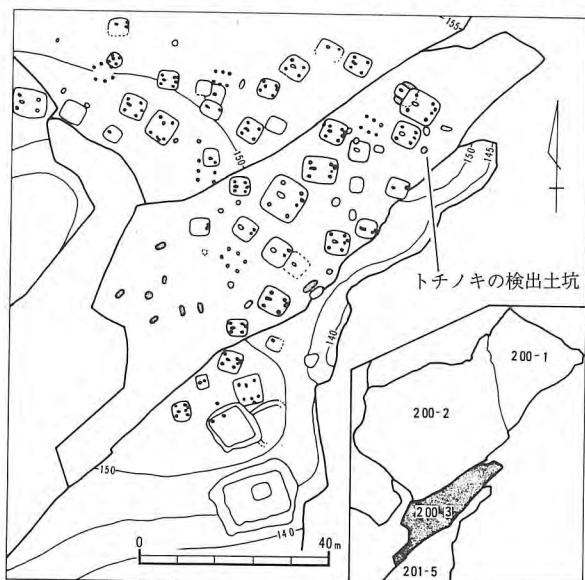
この道路跡を、将来、どのように保存、活用していくかがこれからの課題です。

遺跡だより ④6



多摩ニュータウンNo.200遺跡  
トチノキの乾燥施設

ここに紹介する遺構は、町田市小山町に所在するNo.200遺跡の第三次調査(図参照)で検出された、トチノキの実(以下トチという)を乾燥させた円形土坑です。No.200遺跡は、縄文早期の集落および古墳時代前期の集落・方形周溝墓群が主体ですが、この遺構には年代の決め手になる土器がないため不明です。しかし、隣接するNo.194遺跡の類例から、縄文後期前半と想定されます。No.194遺跡は縄文後期前半の集落で、斜面下から類似する2基の土坑が発見され、その1基からやはりトチがまともに出て出土したものです。本遺跡の土坑は、黒色土からローム層に深さ50cmほど掘



りこまれた、直径150cmほどの規模でたらい状をした形態です。坑の底面には焼土が厚く堆積しており、ここで持続的に加熱され赤化したようです。この坑中から、炭化したトチの実とその細片が430点ほど検出されました。これまでトチに関係する遺構の事例には、フラスコ状土坑の貯蔵施設、果皮が堆積したトチ塚とアク抜き加工処理した水場遺構があります。また、長岡市中道遺跡の火災住居跡の調査で、住居内の棚の上にトチが籠に詰まって保存されていたらしいことも知られるようになりました。ともあれトチは、長期保存を前提に、まずよく乾燥させてから備蓄し、

必要の都度、アク抜きして使用するものです。ですからこのトチを乾燥することの意味を看過できません。

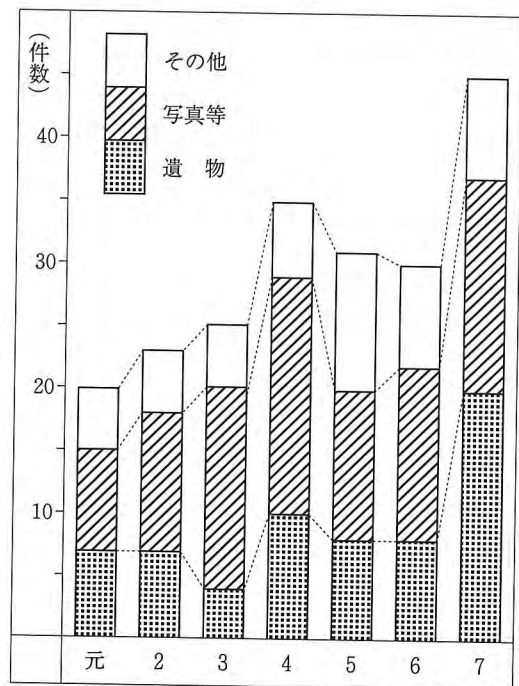
トチは実が熟して落果するのが9月半ばですが、この頃は丁度、台風の到来と秋の長雨に突入する、雨につきまとわれる時季です。もしも水びたしのままトチを放置しておけば劣化は免れず、越冬食料の確保が覚束なくなります。このように見ると、本遺構には火棚をもつ簡易な上屋施設があつて、雨天つづきの折りにでも、焚き火をして乾燥させたのでしょう。坑中から出土したトチは、それがこぼれ落ちたものだったのではないのでしょうか。(田中純男)

資料の貸出し件数の推移

当センターには、

これまでの調査で出土した考古資料が、大量に保管されています。

博物館等で展示会を企画しようとする場合、まず、テーマに即した資料が何処の大学や博物館等で保管されているかを、悉皆調査しますが、



この作業が一苦労です。次に、展示のための借用資料を絞り込みます。当センター保管の資料は、『資料目録』で項目別に整理してあるので活用しやすいためか、このところ各地で催される展示会や出版社からの借用依頼が、頻繁です。そこで、貸出し件数およびその内容が、平成の七年間でどのように変わってきたかを調べ、グラフで示してみました。この図から、七年度に件数が急増したことがわかります。それも、展示会への考古資料の貸出し件数が倍増したためで、この傾向は今年度も引き続きそうな勢いです。センターの目玉商品が各地で活用されるぶん、「貸出し中」の札が展示ホールに目立つのを、うれしい悲鳴というべきなのでしょう。

### 仙台藩伊達家上屋敷の表門

大名屋敷の門は、石高や格式でその形式が定められていました。

今回は、汐留遺跡で検出した奥州仙台藩伊達家上屋敷の表門を紹介します。門跡には、礎石と敷石が残っていました。明治時代以後の建造物によって、かなりの部分が破壊されていきました。このために門の正面に相当する礎石や敷石がすべて取り除かれていきましたが、奥行と幅については残された礎石から知ることができました。門の幅は23.5m、奥行は最大で4.35mです。

## 文化財講座 <27> 大江戸掘りもの帖 ~其四~

この礎石や敷石にはかなり高い熱が加わったようです。中央部の敷石は火熱を受けて縦横に亀裂が入り、かろうじて原形を留めている状態です。

また方形の礎石には、中央部に柱を装着するための一辺が14〜17cmの竪穴が穿たれています。それとこの礎石には角柱の跡と柱に取り付けられていた金具の跡がはっきりと残っています。角柱は一辺が46〜57cmです。

この仙台藩上屋敷の門は、『近世武士住宅』（佐藤巧著 1985年 叢文社発行）に、屋敷の全体像と



手前に見えるのが門の礎石、幅は23.5m

もに次のように記載されています。

「表門姿図も享保度上屋敷図の示す規模と形状をよく伝えている。平面図から正面の柱間が五間（実長八間）奥行の柱間が一間（実長二間）で、左右に間口二間の出番所を備えている……中略……この門は形式的には五間二間の平棟門と呼ぶべきものであろう。（P.478）」

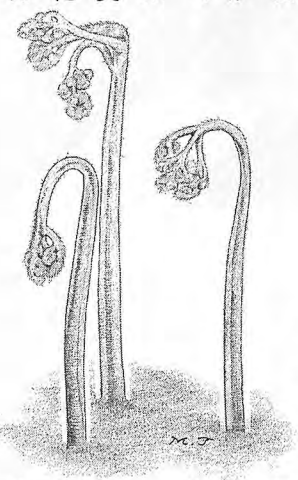
検出した門跡は、幕末の頃に存在していた門と考えられています。『近世武士住宅』に記載されている享保（天明期の門（100年程の時間差があります）の規模によく似ています。享保年間の門は幅が十二間と記載されています。遺跡に残っている門の基礎の幅は23.5m、十二間（京間）に相当します。（小林博範）

### 遺跡庭園の四季（四）

この春の訪れは例年になく遅く、東京の三月から四月の気温は、平年よりも2.5度ほど低かったとのこと。100m上昇するにつれて0.6度ずつ寒くなるというので、東京が高尾山頂に引越したようなものでした。

梅は二月半ばから三月下旬までも咲きつづけ、そのぶん桜の開花も十日ほど遅れ、二週間もちました。庭園に梅と桜は植栽していませんが、春を告げるコブシがあります。

その、いつもは白い豆電球で樹が被われるコブシが、今年には線香花火のようなもの。昨夏の猛烈な暑さと乾きで、樹勢が衰え



穀の種を蒔きました。芽生えました。冷涼の春、晩霜の無きことを祈りながら、摺筆とします。（我孫子）

たようです。

庭園の樹木も大分育ち、トチノキがいつになったら実をつけるものか、梢を見上げつづけてきましたが、今年ようやく、2本の樹に紡錘状の白い花を見ることができました。

草花の類は、樹木の開花と違って温度よりも日照時間が左右するのでしようか。庭園のカタクリは例年通り三月末に花開き、ワラビも四月になると萌えだしました。

五月三日に、恒例となりました雑

### 縄文土器焼き・雑穀の種蒔き

平成八年度の広報普及活動の最初の行事として、五月三日の憲法記念日に、縄文土器焼き・雑穀の種蒔きを行いました。縄文土器は同好の有志が作ったものを、各自持ち寄って焼き上げたもの。また雑穀畑にアワ・キビ・ヒエ・ソバ等を蒔きました。約200名の参観者が古代にタイムスリップした春の一日でした。

### 三内丸山遺跡の映画上映

小・中学校の毎月第二・四土曜日休日に伴う、週五日制対応事業として、六月八日に、映画「木と土の王国——三内丸山遺跡94」を上映しました。この遺跡はマスコミ等に頻繁に登場するため、タイムリーな企画でしたが、肝心の小・中学生の姿は少なく、むしろ中・高齢者層の関心と呼びました。参加者は150名。

—平成八年度 多摩の遺跡と遺物展—

## 「縄文中期・多摩のむら」

埋蔵文化財センターには、多摩ニュータウン遺跡から出土した生きた教材である考古資料を通して、地域に育まれた歴史をご覧いただく展示施設が併設されています。

そして毎年、学校の春休みを前に、新たに発見された資料の公開と時勢に応えた企画テーマを設定しながら、展示の様態替えをしてきました。平成八年度に向けては、通史的な展示とともに、「縄文中期・多摩のむら」を小企画テーマとしました。

縄文時代中期とは、いまから五千五百年前から四千五百年前の一千年間で、長い縄文時代のなかでもっとも活力ある社会だったようです。

ここ多摩ニュータウン地域でもこの時期の遺跡が数多く発見されていますが、とくに次の遺跡が注目されます。

大栗川中流域にあるNo.

72遺跡は、この地域で最大規模をほこる拠点的な集落で、多種多様な遺物を保有しています。その

至近にあるNo.446遺跡もやはり大規模な集落を構成しましたが、ごく短い期間しか営まれませんでした。台地上に立地する中期的な景観の集落と異なり、No.471遺跡の集落は、

尾根筋にあります。No.9遺跡からは中期後半の小型土偶が数多く出土しましたので、祭祀を司る集落だったようです。相模野を一望にするNo.245・248

遺跡は、縄文土器を作る粘土の採掘跡と、この場所を管理していた人々の集落だったようです。

今回の展示は、これら性格の異なる遺跡が、相互に情報ネットワークを構築しながら多摩丘陵に繁栄した中期文化の実態を浮き彫りにしました。さらに中期後半に盛んであった「甕棺・埋甕」風習を再現しました。臨場感ある中期の土器や土偶などに



間近かに接し、観察することにより、この丘陵地を生活の場としていた祖先の姿を実感してみてください。

なおこの数年來、当センターでは都内の各地の遺跡調査も行っています。汐留遺跡・市ヶ谷遺跡・三吉野遺跡群で発掘された資料を、コンコースに速報的に展示しましたので、あわせてご覧ください。

皆様のご来場をお待ちしています。

## 「掘り出された都市」展の開催

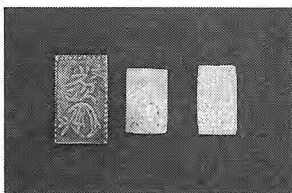
この数年、「江戸」がブームとなっています。マスコミも江戸をこぞって取り上げるせい、都民の江戸への関心が高く、先の汐留遺跡の現地説明会も大盛況でした。

こうした時勢を反映して、この秋、江戸東京博物館を会場に、東京都江戸東京博物館・東京都歴史文化財団・東京都教育文化財団・朝日新聞社の共催による、「掘り出された都市——江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク」展が開催されます。

江戸のコーナーには、当センターが調査した、丸の内三丁目遺跡の豊富な出土品をはじめ、汐留遺跡からも江戸の埋め立て遺構として、上水道管と上水井戸等が出品されます。

開催は十月八日（火）から平成九年一月十二日（日）まで。この間、いろいろなシンポジウムや講演会も行われます。江戸と長崎・出島や堺との比較、外国の都市で行われている発掘の様子など、江戸マニアならずとも見逃せない好企画です。

この機会にじっくりとご覧ください。



保存科学室こぼれ話(一)

今回、紹介します鉱物は、町田市小山15号に位置するNo.200遺跡の、都道相模原・立川線の道路面下の調査地点から出土したものです。

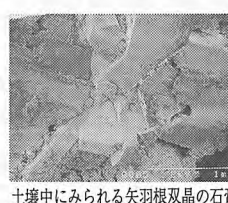
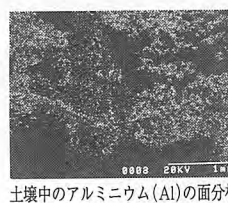
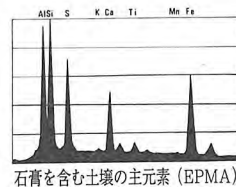
この鉱物が出土した層位は、縄文時代前期の、集石が不規則に並んだ富士黒土層中です。鉱物は透明に近い結晶で、大きいもので長径9mm・短径3mm・幅3mmほどです。これら鉱物を実体・偏光顕微鏡等で鑑定したところ、なんと「石膏」であることが判明しました。

石膏は硫酸カルシウムの鉱物で、古くは五千年前のピラミッドの建築材料に利用されたりもしています。

日本での天然石膏は、石灰岩と硫酸イオンを含む熱水との作用で生成されるのが普通で、粘土中・岩石中・金属鉱床中・火山の噴気孔や硫黄鉱床に付随して産出します。

それでは何故、何処から、どういう目的で、縄文前期の人々が遺跡にこれを持ち込んだというのだろうか、関係者の間で疑問が生じました。

そこで改めて、走査型電子顕微鏡とエネルギー分散装置で分析測定してみたところ、中には粒径が1mm以下という、微細な結晶も含まれてい



ることがわかりました。

このことから何らかの作用により、この場所で自然に結晶化したと考えられるべきようです。酸性雨や排気ガス等といった要因も視野にいれながら、その生成に首をひねっているところです。  
(上條朝宏)

古代の木製食器

さる三月二・三日に、石川県金沢市の(財)石川県女性センターにおいて、第三十九回埋蔵文化財研究集会「古代の木製食器 弥生期から平安期にかけての木製食器」が開催されました。

シンポジウムは、全国の遺跡から出土している木製容器の集通を通して、その変遷と地域性を明らかにしさらに他の材質のもの(土器など)も含めた当時の食器のあり方を復元することを目的としたものです。当日は全国から研究者が集い、各地の



パネラー全員によるパネルディスカッション

研究者の発表と、最近調査された注目すべき遺跡のスライド上映、そして活発な討議が行われました。

当センターからは飯塚武司副主任調査研究員が、「関東・甲信地方の木製容器の推移と変遷」という題で発表を行い、関東・甲信地方の木製容器の推移と変遷、使用の様相(器種構成・箸や漆器の普及・使用者の階層)や生産の様相(木工技術・生産体制)、さらにその社会的背景などについてまとめました。

最後の項目として、各地の報告事例をもとに、二つの話題をパネラー同士が議論し合いました。

一つは、全国レベルでの木製食器の推移について検討がなされ、おおまかな流れをつかむことができました。もう一つは当時の食器使用のあり方、特に材質(土器・陶器・木器など)による食器の使われ方(何を盛るのか)や、食器の普及・組み合わせ・用途(まつりに用いるなど)について、各地の地域性からめながら討議がなされました。

会場を埋めた参加者の熱気でシンポジウムは盛況のうちに幕を閉じ、全国の資料を集めた分厚い資料集とともに、木器研究に新たな一ページを加えることになりました。

(及川良彦・大西雅也)

平成8年度の広報普及事業

日	時	行事名	内容
5/3(金)	祝 10:00~14:00	縄文土器の野焼き 雑穀種まき・参観自由	縄文土器の焼成の実演 庭園でアワ・キビ・ソバ等を作付け
6/8(土)	13:30~16:00	学校週5日制対応事業	映画「三内丸山遺跡」他
6/22(土)	13:30~16:00	学校週5日制対応事業	映画「吉野ヶ里遺跡」他
7/6(土)	13:30~16:00	文化財講演会・映画 定員120名、申込不要	講演「地震と考古学」 講師 服部 仁 鹿島建設技術研究所
8/3(土)	13:30~16:00	文化財講演会・映画 定員120名、申込不要	講演「縄文時代の粘土採掘」 講師 山本 孝司 都埋文センター
8/22(木)・23(金)・9/14(土)		縄文土器作り教室 定員30名	詳細は「広報東京都」等に掲載の予定。 応募者多数の場合は抽選になります。
10/5(土)	13:30~16:00	文化財講演会・映画 定員120名、申込不要	講演「縄文人の精神文化—土偶」 講師 原田 昌幸 文化庁
11/9(土)	13:30~16:00	文化財講演会・映画 定員120名、申込不要	講演「縄文中期の拠点集落と領域」 講師 谷口 康浩 國學院大學
1/25(土)	13:30~16:00	文化財講演会・映画 定員120名、申込不要	講演「縄文時代の墓制」 講師 西澤 明 都埋文センター

●文部省科学研究費補助金の交付

当センターの左記の2名に、平成八年度の内定通知がありました。

竹尾 進 「縄文時代後期の内陸性漁撈について」

大西雅也 「高棺座」を有する横穴墓の基礎的研究」

●定例文化財講座の開催

二月十七日(土)に、平成七年度最後の文化財講座として、当センター

の長佐古真也調査研究員による「江戸の食文化—焼塩壺」と、映画「うつわ—食器の文化」を上映し、

盛況でした。参加者は90余名。

海外研究者の  
視察と講演

五月二十七日(月)に、前チエコ科学アカデミー考古学研究所長で、特に東欧考古学の方法と理論に高い業績をもつ、E・ネウストプニ博士が、汐留遺跡の発掘と当センターの施設を視察されました。併せて、「チエコ考古学の現状」の題で講演されました。



人のうごき

この四月の定期異動で、庶務係長の大概茂博が都立教育研究所に転出、後任として教育庁総務部より牛島忠夫課長補佐が着任しました。また、三月三十一日付で調査研究員の竹花美保が退職、四月一日付で西山博章を新規に採用しました。

分室だより

汐留分室 三月末で龍野藩上屋敷跡の調査を終え、現在は仙台藩、会津藩屋敷跡の調査を続行しています。仙台藩側で、江戸初期の下屋敷段階の建物跡が発見されています。市ヶ谷分室 東御殿の一部、29地点の調査で、屋敷絵図面に見られる御台所の位置から、カマド跡11基が検出されました(写真)。同じく建物跡と思しき範囲に、礎石列が発見されています。



カマドの検出状況

板橋分室 春から初夏へと季節がめぐるように、整理作業も実測・下図づくりからトレース・拓本へと移ってきました。日の出分室 一雨ごとに濃くなる奥多摩の山の緑がまぶしい季節になりました。調査も予定通り終了し、四月から本格的な整理作業に入っています。

西国分寺分室 北東地点の恋ヶ窪南遺跡に隣接する、五千㎡の縄文時代の層が終了し、空撮を行いました。この調査範囲からは、野川に面するように縄文早期後半の堅穴住居跡等が18軒、その外側にはバケツ状の土坑等が130基も検出されました。新川分室 住宅・都市整備公団新川団地の建て替えに伴う、三鷹市島屋敷遺跡の発掘調査が五月から始まり、新川分室が開設されました。この調査には、小林重義調査研究係長(兼務)・今井恵昭・小葉一夫・五十嵐彰調査研究員が担当します。南大沢整理所分室 これまで多摩ニュータウン遺跡の整理の拠点として稼働してきた愛宕整理所が、五月末日を以て閉鎖し、六月一日から、南大沢駅前のパオレビル6Fに、新たに標記分室が開設しました。千葉基次調査研究係長と調査研究員八名が担当します。